

茨城大学学報

第298号

平成23年8月～平成23年9月



日立キャンパス正門前の様子

INDEX

- ◆ 「第51回水戸黄門まつり」に6年連続参加
- ◆ 工学部「ものづくり体験・理科工作教室」開催
- ◆ 復興支援イベントを開催
- ◆ 附属小学校中高学年棟改修工事終了を祝う
- ◆ インドネシア共和国 ボゴール農科大学大学院とダブルディグリー教育プログラムの覚書を締結
- ◆ 附属中学校で「人形浄瑠璃」開催
- ◆ 科学研究費補助金学内説明会を開催
- ◆ 「岡倉天心記念六角堂等復興基金」へ(株)常陽銀行から寄付
- ◆ 常磐大・短大と「単位互換で協定」

茨城大学総務部総務課広報係

TEL 029-228-8008

FAX 029-228-8019

◆ 「第51回水戸黄門まつり」に6年連続参加

去る8月6日(土)に水戸市で開催された「第51回水戸黄門まつり・市民カーニバル in MITO」に、「夏の思い出に みんなで踊ろう」のキャッチフレーズのもと参加しました。

市民カーニバルに参加したのは、全39チーム、約3500人で、山本恵一事務局長、三輪五十二特命教授をはじめ、教職員と学生、OB職員の総勢75名が参加しました。

今年度は、大震災による津波で流失した、五浦美術文化研究所「六角堂」の復興をアピールしようと、カーニバルの装飾車を六角堂に装飾、また、2013年公開予定で、ゆかりの岡倉天心の生涯を描く映画「天心」ののぼり旗を用意して、沿道にいる見物客に「再興しよう!六角堂」を掲げ、積極的にアピールを行いました。

カーニバル終了後に大学で開催した懇親会では、普段教職員との交流のない学生や初参加の教職員とが一丸となって踊り続けた事によって充実感のあるものとなり、最後に来年も全員で参加することを誓い合いました。



左
六角堂をイメージした装飾車の前で撮影
(右から、山本事務局長、三輪特命教授、
OB職員の草薨公一橋大総務課長)

下
市民カーニバルに参加した学生と教職員ら



◆ 工学部「ものづくり体験・理科工作教室」開催

工学部は、日本機械学会関東支部茨城ブロック共催、日立市教育委員会後援の下に、8月26日(金)に地域連携推進の一環として、「ものづくり体験・理科工作教室」を開催し、小学生の高学年生30名とその保護者が参加しました。毎年開催してきたこの教室は今年で6回目となり、今年はものづくり体験として、「電子ピアノ」、「ピンホールカメラ」および「ペーパーウェイト」の3テーマを用意しました。

開会式で、友田陽工学部長、武田誠総括技術部長から、3テーマの製作を通して、ものづくりを楽しく体験してもらうことの趣旨説明がありました。

続いて、テーマ毎の会場に分かれ、「ピンホールカメラ」教室では、原理の説明を聞いた後、外箱と内箱から製作を始めました。「電子ピアノ」教室では、初めて使うハンダゴテを技術部職員からの手助けを受けながら、基盤に素子のハンダ付けを行いました。「ペーパーウェイト」教室では、普段見たことのない工作機械を技術部職員から手助けを受けながら、機械を操作して部品の加工を熱心に行いました。

参加した小学生は、完成した作品を前に満足そうな笑顔を見せていました。帰り際には「来年も参加したい」という声が聞かれ、地域との連携の推進に有意義なものづくり体験教室となりました。



ピンホールカメラの製作会場



「ものづくり体験・理科工作教室」参加者

◆ 復興支援イベントを開催

平成23年8月27日（土）にNHK水戸放送局と共同企画したイベント“ハルカとミチカ”～最先端と身近な機材で触れる宇宙～を宇宙科学教育研究センターのある高萩市さくら宇宙公園で行いました。

このイベントは、震災における復興支援での地域貢献を目的として、本学とNHK水戸放送局が4月から準備を開始し、実現したものです。

第1部では、学生や市民団体の出演するステージイベント、学生が指導する手作り望遠鏡やアンテナペーパークラフト作成、化石発掘などの体験ブース、横沢センター長による出前授業等の屋内イベント、JAXA展やアンテナツアー等の宇宙体験ゾーンが行われました。特に体験ブース「マイ望遠鏡づくりに挑戦だ!」では、出来上がった望遠鏡で天体観測ができることもあって、親子が列を作り人気を集めました。

第2部では、常陸大宮市出身のミュージシャンであるマシコタツロウさんが所属する復興応援プロジェクト「あしたのうた」の皆さんの演奏や、NHK水戸放送局の長谷川静香キャスターによる宮沢賢治の名作「銀河鉄道の夜」の朗読、学生が星空を解説しながらの観望会が行われました。

この日集まった約2,000人の来場者たちは、“ハルカ（最先端の技術での映像）”と“ミチカ（手軽な方法での宇宙）”の魅力に触れました。

なお、この日集められた義援金は「ハルカとミチカ茨城大学学生実行委員」により、被害の甚大であった、高萩市、北茨城市、日立市の県北3市に寄附をしました。高萩市においては、草間吉夫市長との懇談も行われ、学生にとって貴重な体験となりました。



ステージイベントにて学生のサークルパフォーマンスを楽しむ来場者



体験ブースにて望遠鏡づくりに挑戦する子ども達



草間高萩市長（左）に義援金を贈呈する学生実行委員の粟嶋さん（中央）と井掛さん（右）

◆ 附属小学校中高学年棟改修工事終了を祝う

このたびの東日本大震災において、被害が大きかった附属小学校（田中健次校長）の中
高学年棟改修工事が終了し、新教室での授業が開始されました。

新教室完成時には、同校PTAが積極的に引越し作業に参加するなどして、新教室での
授業再開へ向け教職員を支援しました。震災時、天井の一部が落ち、壁が倒壊するなど危
険な状態にあった校舎は、新しく生まれ変わり児童たちの明るい声が響きました。

いまだ復旧作業中の部分が残るものの、去る平成23年9月12日（月）には尾
崎久記教育学部長をはじめ、附属小学校の多くの保護者が見守る中、「中高学年棟改修工事
終了を祝う会」が行われ、喜びをわかちあいました。

また、附属小学校では「東日本大震災の記録文集 - 震災をのりこえて -」を作成、全児
童に配布しました。この文集には、「大震災の体験を忘れず、附属小の未来に伝えよう」と
いう思いが込められており、子どもたちの作文には、大震災の恐怖だけでなく、その中で
互いを守ろうとした友情や思い、被災から立ち上がり未来へ向かう子どもたちの希望があ
ふれ、教員のメッセージには、震災時に必死に子どもたちを守り、復興へ向けまっすぐに
進んでいく様子、卒業生への思いなどが込められています。文集は同校の図書館に設置さ
れ、今後も大震災の体験を伝えていきたいとしています。



改修の終わった教育学部附属小学校の「中高学年棟」



←引越作業を手伝うPTA会員

新教室で授業を受ける児童たち→



←作成された「東日本大震災の記録文集
-震災をのりこえて-」

◆ インドネシア共和国 ボゴール農科大学大学院と ダブルディグリー教育プログラムの覚書を締結

農学部は、9月12日（月）にボゴール農科大学大学院とダブルディグリー教育プログラムの覚書をボゴール農科大学国際会議場において締結しました。

この新しい教育プログラムは、両大学院の修士課程の学生が所定の履修期間において、本学とボゴール農科大学の双方の大学に学び、双方の大学において修士研究を実施することで、双方の大学の修士の学位を取得するものです。調印式には、両大学学長を始め、関係者ら約100名が出席し、太田寛行農学研究科長とボゴール農科大学の Dahrul Shah（ダハルル・シャツハ）研究科長が覚書にサインをしました。

調印に先立ち、両大学学長から挨拶があり、Herry Suhardiyanto（ヘリー・スハルディヤント）学長は、「多様な生物資源を保有するインドネシアにおいて環境と地域のサステナビリティの向上のために、グローバルな視点から人材育成が必要である。そこでは知識や情報の伝達のみにとどまるのではなく国際的な協働の取り組みができる人材が必要であり、今回のダブルディグリー教育プログラムは地域の課題をとりあげながら国際的な連携で人材開発に取り組むものであり、まさに次の世代に向けた大学院カリキュラムとして期待される。」と述べ、池田幸雄学長は、「日本とインドネシアは異なる自然環境と文化を保有しており、これらを国際的かつ学術的にあらゆる視点から教育・研究に焦点をあてる本プログラムは両大学の恒久的な学術・研究の発展につなげることができるものである。」と述べました。

ボゴール農科大学は、1963年に創設されたインドネシアの国立大学であり、農学を中心として理学、社会学など9学部を持つ総合大学で、本学とは2008年に大学間交流協定を締結しており、今秋から本プログラムの受け入れを開始する予定です。



左から Dahrul Shah 研究科長、Herry Suhardiyanto 学長、
Ir.Illah.Sailah（イラハ・サイラハ）文部大臣代理、池田学長、太田農学研究科長

◆ 附属中学校で「人形浄瑠璃」開催

9月13日（火）、教育学部附属中学校体育館において、文化庁主催「子どものための優れた舞台芸術事業」、「八王子車人形」による人形浄瑠璃が行われ、小泉晋弥校長、教職員、保護者、生徒全員の約500名が鑑賞しました。

この事業は、小学校・中学校等において、一流の文化芸術団体による巡回公演を行い、次代の文化の担い手となる子どもたちの発想力やコミュニケーション能力の育成を図り、将来の芸術家の育成や国民の芸術鑑賞能力の向上につなげることを目的として行われています。

本校は、昨年度もこの事業に応募し、能楽鑑賞の機会を得、日本文化の一流芸に魅せられました。

今年度の人形浄瑠璃の演目は、「人形三番叟」「東海道中膝栗毛」「洋舞スパニッシュダンス」等、親しみのある演目や華やかなフラメンコの舞に生徒一同見入っていました。特に、人間国宝の鶴賀若狭掾（つるがわかさのじょう）氏の美しい声の響きには、感嘆させられました。また、猛暑の中、体育館での演技は、途中の退出者がいないほど真剣そのものでした。

途中、人形・新内節の解説と体験教室があり、本校の生徒13名も舞台にあがり、夏休みに「八王子車人形」の方々から指導を受けた上での演技披露では、金子みすゞの詩を新内節にアレンジして唄ったり、車人形を実際に操ったりし、大変な喝采を浴びていました。

本校の教育活動・体験活動が生徒の卒業後の活動や職業に結び付いていることから、文化面での更なる支援が確認された一日となりました。





舞台上がり演技を披露する生徒ら



人形浄瑠璃芝居の様子



◆ 科学研究費補助金学内説明会を開催

平成23年9月21日（水）に水戸キャンパスにおいて科学研究費補助金学内説明会を開催しました。この説明会は科学研究費補助金制度に関する意識向上を目的に、応募件数の拡大と採択率の向上を企図して、さらに公的研究費の適正な執行を確保し、不正防止等の徹底を図るため毎年開催しているものです。

説明会は、池田幸雄学長の挨拶につづき、神永文人理事・副学長（学術担当）から本学における科学研究費補助金の申請と採択状況についての説明が行われました。

続けて、学内から採択実績の高い教員を講師に迎え、科学研究費補助金の応募のポイントについて説明が行われ、その後、不正防止計画推進本部から公的研究費の不正防止について説明が行われました。

当日は、水戸から離れた場所にある日立キャンパス、阿見キャンパスにもバーチャルキャンパスシステムを利用して説明会の様子を同時配信したことにより、多くの教職員の参加を得ることができ、参加者数は120名にのびりました。

この説明会は、実際の採択実績の高い教員からノウハウを聞くまたとない機会となり、研究計画調書を作成する上で大変参考になる充実した内容であったため、参加者からは大変好評でありました。



挨拶する池田学長

◆「岡倉天心記念六角堂等復興基金」へ（株）常陽銀行から寄付

東日本大震災で流出した、五浦美術文化研究所六角堂の復興基金として、9月26日（月）に（株）常陽銀行（寺門一義頭取）から、寄付金300万円が池田幸雄学長へ寄贈されました。

同行は、茨城県内の文化財復興、観光振興に関する取り組みとして「常陽地域復興プロジェクト『絆』」を推進しており、今回、その一環として本学の岡倉天心記念六角堂等復興基金へ寄贈されました。

寺門頭取は「六角堂の復活は震災復興のメルクマール（指標）となる。そのお手伝いができれば」と述べ、池田学長からは、「ぜひ、明治38年の設立当時の姿に戻したい」と語りました。

その後の懇談会では、三輪五十二特命教授からこれまでの復興に関する取り組みや今後の復興計画についての説明があり、また、今回の震災に関する、本学と（株）常陽銀行におけるそれぞれの復興への取り組みなどの意見交換が行われました。

本学と（株）常陽銀行は、地域の発展と産業の振興に寄与することを目的として連携協力協定を締結しており、今後も震災復興に向けて相互協力していくことが確認されました。



目録の贈呈（左から池田学長、寺門頭取）

◆ 常磐大・短大と「単位互換」で協定

本学は、9月27日（火）に常磐大学及び常磐短期大学との間の単位互換に関する協定締結式を水戸市内のホテルにおいて挙行了しました。

式は、本学から池田幸雄学長、田中重博副学長、佐々木寛司人文学部長、齋藤典生評議員、鈴木敦大学教育センター副センター長が、常磐大学から森征一学長（常磐短期大学長兼務）、依田泉副学長、長谷川幸一副学長、伊佐山忠志副学長が、常磐短期大学から瀧口泰行副学長が参列しました。

鈴木副センター長から、協定に基づき平成24年度から単位互換を開始し、双方の大学資産を持ち寄り新しい教育を開始する旨の概要説明があり、池田学長、森学長が協定書に署名し協定書の交換を行いました。

池田学長から、この単位互換協定は両大学の教育を豊かにし両大学の連携の出発点を期すものであり、茨城大学憲章に則り大学の基本方針に合致し両大学の発展を期待できるので、研究・地域貢献への連携を更に進めて行くと挨拶があり、続いて、森学長から、協定の締結により学生を相互に受入が可能となることは、新たな学生交流・教員交流が生まれ、大学の垣根を越えた画期的な教育が可能となり、常磐大学にとって夢の出発点となったと挨拶がありました。

続いて、県内の主要報道機関から多数の出席があり記者会見が行われ、コンソーシアム、授業の形態、授業科目等の質問に対し、佐々木人文学部長、依田副学長から説明を行いました。池田学長は、今後、教育連携に止まらず研究・地域貢献につながる連携を深めて行きたいと抱負を述べ、協定書締結式は終了しました。



左：森学長 右：池田学長